故ウィルフレッド・スミス教授の業績

小　原　敬　士

1956 年 10 月，イギリスのランカシア地方を訪れたとき，私は，2 つの目的をいだいていた。その 1 つは，Manchester, Blackburn, Oldham, Prescott その他のランカシアの古き綿業都市をみることであり，もう 1 つは，リヴァプール大学のすぐれた経済地理学者 Wilfred Smith 教授に会うことであった。その 2 つの望みのうちの 1 つは不十分ながら果すことができた。あわただしい旅ではあったが私は，よく発達したバス網に頼って，町から町へ，村から村へと遍歴し，古い town-hall，いまだに残っている yoeman house，古い木綿工場のあとなどをみることができたのである。しかし，もう 1 つの望みは，これは永久に叶えることができなかった。というのは W. Smith 教授は，前の年（1955 年）の 9 月 7 日に，急性の心臓病のために，その 52 歳の生涯をとじていたからである。それはなんとも残念なことであったが，もはや致し方がなかった。私は，British Council の好意で，教授がそれに献身したリヴァプール大学地理学部を訪れ，教授の夫人と愛弟子 E. S. Simpson 氏に会い，教授の追憶談をきいたり，遺著をみせてもらったりすることでみずからを慰める外はなかった。しかし，教授の仕事場であったリヴァプール大学地理学教室の有様をみ，それらのひとびとの話をきくと，教授のすぐれた学問的業績と，高き人格に対して，改めて尊敬の念を厚くしないわけにはゆかなかった。ここに一文を草して教授の業績を回顧する所以である。

1903 年 Halifax に生れた Wilfred Smith 教授は Blackpool Grammar School で基礎教育をうけた後，1921 年リヴァプール大学にすすみ，P. M. Roxby 教授について地理学を修めた。そして，同大学大学院を終えた後，1928 年 Roxby 教授の下に assistant lecturer となり，1931 年 lecturer, 1945 年 Senior lecturer に昇進し，最後に 1950 年ジョン・ラスキン講座の正教授の椅子についた。その後，彼は 1953 年には同大学技芸学部（Faculty of Arts）の学部長に選ばれており，したがって彼はその一生をすべてリヴァプール大学に捧げたといっても差支えない。しかし，それと同時に教授は王室地理学協会マーシーサイド支部長，Institute of British Geographers の会長などをも勤めており，晩年の彼は，イギリス地理学界における押しも押されもせぬ重鎮であった。

スミス教授の学問的活動はきわめて早い時期から始まった。彼は早くからロックスビー教授の指導のもとに中国の経済地理に関する研究を行い，1926 年には *A Geographical Study of Coal and Iron in China*, 1926 を著わした。それは，彼が 23 歳のときのことであった。この書物は「中国の将来の経済地理における石炭並びに鉄鉱供給の位置を論じようとするもの」(M. Roxby) であったが，そこには，中国の各地に分布する石炭，鉄資源のそれぞれの経済的価値が，豊かな歴史的展望のもとに検討されており，同教授のその後における学問的発展の方向がはっきりと予告されていた。

その後のスミス教授の主たる興味は，イギリスの産業立地とそれに関する方法論の問題に向けられたようにみえた。中でも彼は，自分に身近かなランカシア，ことに Merseyside に，その学問的焦点を集中させた。そして彼は 1934 年以後，Fylde の農業地理，ランカシアの木綿工業，その人口分布などの問題に関する一連の論文を発表し，1941 年には D. Stamp 教授の編集による *Land Utilisation Survey* の中の *Lancashire* の巻を担当執筆した。1942 年の *The Distribution of Population and Location of Industry in Merseyside*, 1946 年の *A Physical Survey of Merseyside* なども，すべてその線に沿う業績であった。

1949 年にはスミス教授は *An Economic Geography of Great Britain*, 1949. を著わしたが，この書物こそは，経済地理学に独立の社会科学としての内容を与えたものであり，また著者それ自身に，すぐれた経済地理学者としての不動の地位を約束したものであった。全く，この書物はすぐれた著作であった。それは著者の過去 20 年あまりの撓みなき探求によってえられた詳細で豊富な知識にみちていたばかりでない。なによりも重要なことは，著者が経済地理学を真の客観的科学たらしめるような方法論を体得し，それを，諸事実の分析と整理のために適確に駆使していることであった。中でもスミス教授が従来の地理学者の通弊であった地理的唯物諸的独断からはっきりと脱け出し，あらゆる地理的所与の意味

を，つねにわれわれの経済生活の歴史的発展の光のもとに解明しようとしたことは，まことに尊敬すべき卓見であった。そもそも経済地理学の学問的性格に関する教授の見解自体が，他の経済地理学者のそれとはいちじるしく違っていた。彼はいう。「経済地理学は，比較的静態的な要素をもってはいるけれども，静態的なものではなくて動態的なものである。その国の骨格は人類史の間隔において比較的に固定的であるかもしれないが，それもまた経済分布を造形するところの人間の知識や技術は，数世代のうちに変化することがありうる。」(*Ibid.*, xiii) と。教授はこのような基本的な立場から，つねに地理的諸事象を，人間の経済生活の歴史的変化の流れの中においてみようとした。あらゆる地理的条件の現実的社会的意義は，そのような見方をとることによってはじめて明らかとなるのであるが，教授はそのような方法を用いて，イギリスの経済地理的諸問題を真に生き生きとした姿において解明することに成功した。それは例えばランカシア地方の工業分布の研究によくあらわれている。元来，ランカシア地方における毛織物工業および木綿工業の発展と地域的集中については，従来これを，湿度，水力，石炭などの自然条件によって説明することが広く行われていた。少くとも経済地理学者の間では，そのような説明方法が一般的であった。ところがスミス教授の場合は大分ちがっていた。かれは，この問題を考える場合に，ランカシア工業の歴史的背景に十分な考慮を払い，自然条件の意義の評価についてはつねに警戒的であった。同じくリヴァプールを本拠として活動したすぐれた経済史家ワズワース A. P. Wadsworthは「木綿工業におけるランカシアの初期の優越性に関する伝統的解釈—その湿潤な気候—は甚だしく疑わしい」ことを指摘するとともに，それはおそらく小ヨーマン資本家の一般的存在となんらかの関係をもっているにちがいないことを主張しているのであるが，スミス教授も，海岸の South Port や Blackpool は Bolton, Burnley もしくは Manchester と同じ位高い湿度をもっていることを指摘し，「それゆえに，木綿工業がランカシアの特定の部分—東部ランカシア—に細かく立地していることは，相対的湿度によるものではない，」(*ibid.*, 1 st ed., r. 466) というのである[1]。教授はこのような真に科学的な研究方法を徹底せしめることによって，経済「地理学」を真の意味の「経済」地理学たらしめたのである。

1) この点の詳細については拙稿「ランカシア木綿工業の発展とその歴史地理的条件」(『社会経済史学』第 16 巻 4 号，第 17 巻 1 号，同 2 号) を参照願いたい。

スミス教授は『1 つのイギリス経済地理学』を出版した翌年の 1950 年リヴァプール大学地理学部ジョン・ラスキン講座の教授に就任したが，その就任講演 *Geography and the Location of Industry, An Inaugural Lecture by Wilfred Smith*, 1952. もかれの考え方を知る上に重要な文献[2]である。工業立地論に関するかれの考え方は，Alfred Weber のいわゆる運送指向論や労働指向論と共通な問題をもとり上げてはいるけれども，その基本的立場は Alfred Weber やアメリカの C. B. Hoover などとはかなりいちじるしく異っている。それは「地域的技術 regional skill は歴史の遺物であり，その地域に特定の工業が存続していたことの所産である，」「工業景観は 1 つの寄木細工であり，それは古い時代の分布の遺物が現代まで生き延びてその構造に組み入れられたものである，」というようなかれの言葉をよめばおのずから明らかであろう。

1953 年にはスミス教授はその監修にかかる *A Scientific Study of Merseyside*, 1953 を世に送ったが，これまたかれ自身の撓まない学問的精進と，かれのすぐれた組織能力の見事な結実であった。この書物は 20 数人の地理学者，地質学者，気象学者，海洋学者，経済学者，社会学者，歴史学者などの協力によって，Merseyside 並びに Merseyside district の自然と社会を多面的に究明しようとした Symposium[3] であるが，スミス教授はこの共同研究の組織と推進の仕事に当るとともに，みずから "Merseyside and the Merseyside District," "Present Distribution of Population", "The Location of Industry", "The Urban Structure of Liverpool", "The Agricultural Geography" の 5 つの論文を執筆している。これらの論文はいずれも教授の永年の労苦多き実態調査から生み出された着実で真摯な研究であるが，中でも "The Location of Industry" は，最近の Merseyside の産業立地状況を，イギリスの国土開発計画の一環としての「都市連結」conurbation を背景として解明しようとしたものであって，まことに価値高く，また興味ある研究であるように思われる。Merseyside の研究については，教授はなお多くの研究計画をもっていたようで，その急逝の当時 The Jour-

2) この文献については，笹田友三郎氏の紹介「地理学と立地論—ウィルフレッド・スミスのリヴァプール大学教授就任講演」(同志社大学『経済学論叢』第 7 巻第 3 号) がある。

3) 拙稿「マーシーサイドの産業構造」(『地理』第 2 巻第 5 号) は，主としてこの書物により，自分自身の見聞をまじえて，Merseyside の産業構造を解明しようとしたものである。

ney to work on Merseyside と題する著作を執筆中であったと伝えられるが，それは惜しくも遂にわれわれの眼に触れることがなかった。

スミス教授はリヴァプール大学の地理学科の外，教育学科や建築学部においても講義を行っており，ことに建築学部の都市計画科から出ている *The Town Planning Review* には多くの論文を寄稿している。"The Location of Manufacturing Industry in Great Britain" (Vol. xxi, No. 1. April 1950), "Industry and the Countryside" (vol. xxv, No. 3. October 1954) などがそれである。その外，当時かれは Royal Geographical Association の Merseyside 支部長，Institute of British Geographers の会長などをもつとめており，その日常生活はきわめて繁忙であったようであるが，その激務がかれの寿命を短くしたようである。

私はついにスミス教授に会うことができず，わずかに未亡人や弟子の E. S. Simpson 氏からの話によってかれのすぐれた人柄を偲んだだけであった。次にかかげるリヴァプール大学地理学 lecturer, F. J. Monkhouse 氏の筆になる追悼文はおそらく故スミス教授の人柄を伝えて遺憾のないもののように思われるが，それにつけても惜しい学者を失ったものだと思う。F. J. Monkhouse 氏はこうかいている。

「かれは静かなやさしい魅力のあるひとであって，打てば響くようなユーモアのセンスをもっていたが，それは，かれの謙譲で，ときにはむしろ壮重にみえる挙措と対照をつくっていた。かれの同僚や学生は，かれのところへ行って学問的なことでも個人的なことでも，助力や助言を乞えば，いつでも十分にそれがえられないことはなかった。そのひとたちは，どれほどかれの指導やお手本のおかげを受けているかをよく心得ている。そのために，かれの学科は学問的に華やかな学科であったと同時に，ほんとに仕合せな共同体であった。かれは特に海外の学生に関心をもち，かれらに対して多くの個人的注意を与えた。私たちは，学科のこと，大学のことなど，かれの多くの関心事を十分に分担したかれの夫人に対して心からの同情をささげる[4]。」

4) F. J. M., "Obituary. Professor Wilfred Smith," (*The Geographical Journal*, Vol. cxxii, Part 1, March 1956, p. 139—140.)

書　評

高　田　保　馬

『消費函数の研究』

（大阪大学経済学部社会経済研究室：研究叢書第五冊）有斐閣　昭和 31 年 (1956)　148 頁　200 円

著者の謙虚さから，自序の冒頭に「本書は実質に於てデュウゼンベリ消費函数論の批判的研究と云うべきである」と述べられているが，これは本書の内容を字義どおりに示す言葉ではない。

本書によって "Income, Saving, …" に於けるデュウゼンベリ理論の実体がきわめて明快に浮彫されていることは事実であり，高田博士の意識がそれに向けられていたことも首肯される。

しかし，結果として現れたものは，（批判という消極的範囲をはるかに超えた）高田博士自身の体系の展開であり，そこでデュウゼンベリの業績は一種の触媒としての役割を果しているにすぎぬことを，読者は容易に見出すであろう。

すなわち，碩学年来の蘊蓄が，デュウゼンベリ理論の出現を契機として迸り，結晶したものが本書である。

いわゆるケインジィアン消費函数の改訂者として，とくにデュウゼンベリイが注目されたのは，新な変数を導入するに際して彼のみが比較的詳細に原理的展開を伴わしめたことによる。（後に示された彼の資料分析手腕の卓抜さは一般には理解されていない。）少くとも，彼はクロス・セクション資料，時系列資料の双方を統一的に説明することを意図し，或る程度までそれに成功した。それが timely に発表されたことが大きな説得力をもたらしたことは否定できないが，その後デュウゼンベリ仮説が，その資料との適合性に関し疑点の存することを指摘されながらもなお権威を保持している秘密は，やはり原理的に統一された（少くともそのように意図された）理論体系が呈示されている点にあろう。

デュウゼンベリ式に代るべき式は種々挙げられている。しかしデュウゼンベリ理論に代るべき理論は未だ充分に展開されていないのが現状である。その原因の1つはデュウゼンベリ仮説の根底にある社会学的性格が，若い世代の批判者をしてその対象の理解を困難ならしめていたことにあるようにおもわれる。

"Income Saving …" におけるデュウゼンベリの